眺め方と描かれた地域の把握からみた絵図の描画要件に関する研究

谷口　亮[1]・佐々木　葉[2]

[1]非会員　早稲田大学大学院創造理工学研究科建設工学専攻
（〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1，E-mail:kabikichi23@akane.waseda.jp）
[2]正会員　博士（工学）早稲田大学創造理工学部社会環境工学科
（〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1，E-mail:yoh@waseda.jp）

本研究は地域の全体像と部分像を同時に表示できる表現メディアとしての絵図に着目して，その描画上の要件を導き，さらにその要件が過去に描かれた絵図に含まれていることを検証することを目的とする．結果として，風景の入れ子性，空間への参加，定位という観点から考察し，テクスチャ，場の景，ルート，意味領域，名称，配置，方向という7つの描画上の要件によって，絵図に描かれた地域の把握を可能にすることを示した．また「江戸名所之絵」を事例に7つの要件が含まれていることを示した．

キーワード:，絵図，眺め方，地域の把握，描画要件，鍬形惠斎

１．はじめに

⑴ 研究の背景

我々にとって，風景を見るとはいかなることか．また，風景を見ることをとおした地域認識とはいかなる仕組みに基づいて行われるのか．そういった根本的な疑問に対して，主体の絵図に対する「眺め方」と「把握の仕方」，その眺めと把握を誘発するための絵図の「描き方」という観点に着目して考察を進めてゆく．

現代は，多様な主体が存在し多様な見方で地域が捉えられている時代である．透視画法的な写真では地域の一面しか捉えられない．そこで，地域の姿や周囲の環境，街路やささやかに置かれたしつらえの数々，そういったさまざまなスケールの対象に対する人々の多視点的認識を可視化する装置である絵図に，筆者は地域記述の新しい方法論としての有用性を感じている．

研究の切り口として，絵図に対する主体の眺め方と，その把握の仕方の間にはある種の同一性がある，という考え方を提出したい．それを踏まえ「絵図を眺める主体がどのように地域を把握するのか」，また，「絵図の眺め方がどのように地域の把握につながるのか」という２つの問いを説明付けることで，「絵図がどのように描かれていると，眺めた主体が地域を把握できるのか」という問題へアプローチする．

⑵ 研究の目的

上述の問題意識に則り，絵図を眺める主体の眺め方の特徴と，その特徴を可能にする絵図の描き方の要件を概念的な考察から提示する．さらに，ここで明らかになった描画上の要件が過去に評価されてきた絵図に含まれていることを検証し，その要件の妥当性を裏付けることを目的とする．

２．既存研究と本研究の位置づけ

⑴ 既存研究

絵図研究は学際的に行われており，それぞれの分野で主題となるテーマや方法論は異なる．ここでは，絵図研究の代表的な３つの観点と風景の把握方法に関する研究について敷衍し，本研究の位置付けを提示する．

a) 歴史的観点[1) 2) 3)]

歴史学や歴史地理学から提出されている観点である．絵図を，当該地域のかつての景観や世界観を表象している媒体と見なして，過去の地域の景観の姿や，人々による地域や社会，世界の捉え方を明らかにする方向の研究がこの観点に含まれる．また，絵師の人物研究として鍬形惠斎や五雲亭貞秀，吉田初三郎に関する研究に一定の蓄積が見られる．その中で，絵師の思想や絵図に表現されたあらゆる事柄についての論説，さらには当時の絵図の流通形態などに関する研究もある．社会，絵図，絵師の関係が多面的に捉えられている．

b) 図像的観点[4) 5) 6)]

美術史学や建築学，記号学などから多く提出されてい

る観点である．絵図を数多くの図像が織り込まれたテクスチュアとみなし，その織り方やパタンを追求する．提出されている図像は何であり，それが画面にどのように投影され，組み合わされて配置されているかを検証する．また，描かれた図像の技法を解明しようとする研究もみられる．あくまで図像の構成パタンや内容など，作者の思想と離れた位置から表象としての絵図の意味構造を把握する立場である．

c) 記述論的観点[7) 8) 9) 10)]

情報工学や土木工学など，地図学などから提出されている観点である．情報の視覚化の方法について考察，提案したものや，過去に描かれた絵図の再現を数理的なアルゴリズムによって試みたもの，浮世絵の非透視図法の構成原理を再現しようとしたもの，また魚眼マップやガリバーマップなど，地域記述の新しい表現方法を探る研究などがある．デフォルメ空間や画面構成，地域の記述の方法を探ってゆく観点である．

d) 風景の把握方法に関するの研究[11) 12) 13)]

風景の捉え方について論じた研究は多い．本研究に関係するものでは，中村の風景の入れ子構造や仮想行動理論に関するもの，また建築分野から数多く提出されている定位の概念に関する研究などがある．

⑵ 研究の位置付け

本研究はあくまで描かれたものを眺める主体の眺め方と，絵図の描き方の関係性をみるものであり，歴史研究や図像研究ではない．後者は過去の歴史的事実や思想の在り方，世界認識の方法を絵図や文献史料から読み取る立場であるからである．あくまで本研究は，特に佐々木[14)]によって提起されている，カメラで撮影した画像や透視画的では捉えられない地域像の記述に対する新しい方法を基礎づけるものである．

⑶ 研究の方法

そこで絵図に対する主体の「眺め方」を絵図の多視点性から提示する．次に風景論により提起されている考え方に則り，絵図を眺める主体の「把握の仕方」について位置付け，把握の手がかりとなる描画上の要件を確認する．さらに絵図の眺め方と把握の仕方の具体的関係を説明する．それにより，描画上の要件を満たすことで，絵図を眺めた主体が描かれた地域を把握できることを概念的に説明する．さらに，具体的な絵図の中にその要件が含まれていることを確認する．

３．絵図に関する特徴の整理

⑴ 絵図とは

本研究において絵図とは「一視点からでは捉えなれない地域の全体像と部分像を同時に表現し，地域の認識が反映された絵」と定義する．それは絵図が，表現される地域の事物のスケールに多様性があるという点で，写真や地図とは本質的に異なる次元にあるという意味を強調するためである．この点に関しては次節で解説する．さらに，絵図を眺める主体が全体像と部分像を同時に相互的な視点移動を通して，地域をより深く把握できる仕組みを内包するものでもあることを強調する．この眺め方の特徴は本章⑶にて，また把握の仕方の具体的な内容とそれを主体に誘発させるための描画上の要件については次章にて考察する．

⑵ 絵図の表現的特徴：他のメディアとの比較から

絵図を「全体像と部分像の同時」表現と定義したように，絵図が多視点的な表現メディアであることに着目する．以下で，写真，地図，航空写真との比較によって絵図の特徴を浮き彫りにする．

写真の特質は，画角さえ適切に選べば，誰でも簡単に全ての眺めを写し取ることが出来ることにある．それは透視画法に則る近代の眼が息づいている．つまり，写真はカメラの機能として，ズームイン・ズームアウトによって，眺めを画面に収め込む範囲こそ撮影者によって自由に選択できるものの，そこに写し取られる眺めは，現実の客観的な視覚像に基づく．すなわち，写実的であり単視点的である．それに対して絵図は，画面に収める眺めの範囲だけでなく，描き込む要素や形態に対して自由なデフォルメが可能である．

地図との比較に対してはどうだろうか．地図は，客観的な土地の位置関係が地名とともに克明に記述されている．また，透視画法に基づいた記述ではないため主体の視点は束縛されない．この点は絵図と同様である．ただ，地図は単一のスケールに基づいた記述であるという点に，絵図との相違がある．絵図は，位置関係の正確さにおいて地図には劣るものの，地上の雰囲気や認識の形を単一スケールに縛られず，一挙に画面に落とし込むことができる．

最後に航空写真と比較する．航空写真は地域を真上から見下ろした写真であるため，地図同様記述できる内容は客観的である．地図と比べると場所の座標や形に多少のゆがみが生じるものの，写真であるために土地利用形態が写実的に映し出される．地図同様，単一のスケールに基づいたの記述であるために，サイズの小さい事物に関してはつぶれてしまう．それに対して絵図は，規定されたスケールの大小に関わらず事物を記述することができ，さらには地域全体の様子を，色彩や絵描き方の工夫

によって柔軟に表わすことが可能である．

このように絵図には絵としての眺めの他に，図としての位置関係の認識が表現される．

それこそ単一視線では捉えることの出来ない詳細なまちのしつらえや，見えないはずの遠景までを一挙に手中に収めることが可能である．時間に関しても，ひとつの瞬間の相だけではなく，当該地域の季節の名所や祭事など異なる時間相にある出来事を一画面に共存させることができるだろう．絵図には地域のさまざまな事物を，多視点的に記述することができるといえる．

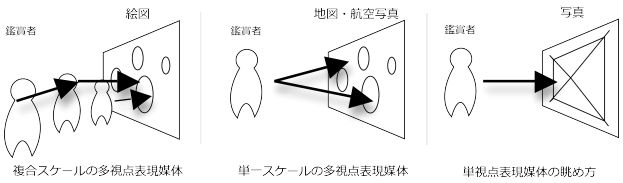


図-1　鑑賞者の眺め方の違い

⑶ 絵図の眺め方の特徴

以上の比較を通して，絵図には写真や地図，航空写真にはない多視点的な像を表現できることが理解されるだろう．加えて，主体による描かれた地域の眺め方も多視点的であることを考えると，絵図の把握の仕方は必然的に複数の視点からなるだろう．また，描かれた地域の把握は絵図を眺めるという行為によってなされると考える．絵図が多視点であるということを鑑みると，　以下の３点の特徴的な眺め方が考えられる．

① 地域の全体像を一目で眺める

② 地域内部の部分的な事物を眺め仮想的体験できる

③ 全体と部分を飛躍的に視点移動しながら眺める

では，これらの眺め方を可能にしているのは一体いかなる把握の仕方なのだろうか．また，その把握の仕方に基づくと，どのような描画上の要件を考えることができるのだろうか．

４．絵図の要件に関する理論的考察

本章では問題意識と前章での絵図の特徴の整理を踏まえて，具体的な描画上の要件を導出する．それらを導くにあたって，幾つかの概念を提出する．

まず，３章で示したように，絵図の眺め方の特徴には，全体像を眺める，部分を眺め仮想体験をする，飛躍的な視点移動をしながら眺める，という３つがあることを示した．１章の背景にて述べたように，　眺め方を基礎づけるため「絵図を眺める主体の地域を把握する仕方」を考える必要がある．さらに，「絵図の眺め方がどのように地域の把握につながるのか」を考えて，眺め方と把握の仕方にどのような関係があるのかを示す必要がある．それを踏まえた上で，絵図の描画上の要件が，絵図をながめることで地域の把握に繋がることを述べる．

以下に，それらを具体的にまとめたものを示す（**表-1**）．ここで先に，絵図を描くにあたって必要になると考えられる描画上の７つの要件を提示しておく．それは「テクスチャ」「場の景」「ルート」「意味領域」「名称」「配置」「方向」である．ただ，これらの要件は，仮説的に導かれたものであり、実証に関しては視覚実験等の実験が必要であると考えている．

表-1　眺め方，把握の仕方，描画上の要件

眺め方の特徴	把握のスキーマ	把握の仕方の種類	描画上の要件	定義
①全体像の把握 ②部分像の仮想体験 ③全体と部分の飛躍的な視点移動	中心＝場所 方向＝通路 区域＝領域	入れ子	テクスチャ	土地の様相
			場の景	場所を特徴づける風物や事物
		参加	ルート	地域を巡る道筋
			意味領域	同様の意味を持つ領域
			名称	地名や建物などの名前
		定位	配置	画面内の要素の配置の工夫
			方向	描く方向

以下の１節から４節にて「絵図を眺める主体が，どのように地域を把握するのか」という問いをもとに，絵図に描かれた地域の把握の仕方について論じ，それに基づいた絵図の描画上の要件を示す．そして５節にて「絵図の眺め方がどのように地域の把握につながるのか」という問いをもとに，眺め方の把握の仕方への関わりについて述べる．最後に６節にて，絵図の描画上の要件による把握の仕方の関係について詳細に論じる．

⑴ 絵図に描かれた地域把握のスキーマ

建築学のノルベルグ・シュルツ[15]は，ピアジェの知覚心理学の理論を参考にし，主体が地域を眺め，その構造を組織化する際の空間のトポロジー的な３要素を導いている．それは中心＝場所，方向＝通路，区域＝領域である．シュルツは主体自らを空間の中に位置づけるするためには，これらの要素をまず把握するあると述べている．

このように絵図において，主体はまず中心的なものを場所，線的なものは通路，区域的なものは領域と捉えるスキーマを有すると考えられる．よって，絵図を眺める際はこれら３つの要素が大づかみ把握される．

⑵ 風景の入れ子的把握

風景学の中村[16]は，風景の見方は入れ子の構造にあると述べている．周囲を平坦なまなざしによって見るのではなく，広い視野をもって全体の様子を一挙に捉える視

点と，風景の中に存在する添景やテクスチャの細密さを狭い視野により詳細に読み取るという，伸縮運動を伴った視点である．絵図にズームイン・ズームアウトしながら地域を把握してゆく仕方である．

大地の様相であるさまざまな「テクスチャ」が，地域の全体像の理解を促す．さらに，点状に描き込まれた「場の景」が鑑賞者の視線をズームインさせる．絵図を入れ子のように見ることが出来るためには，このように「テクスチャ」と「場の景」を描画することが重要であると説明できる．.

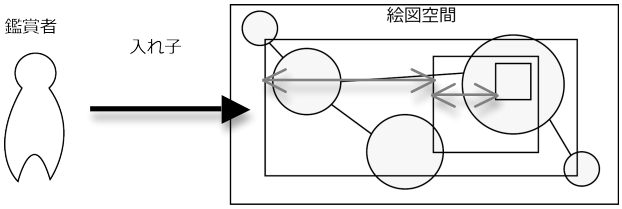


図-2　入れ子的把握

⑶ 空間への参加[17]：臥遊的把握

伸縮する視点による把握だけでは，絵図内部に鑑賞者の視点を留まらせておくことはできないと考えられる．

そこで，絵図内部に「代理の自我」を誘発させる必要がある．鑑賞者が絵図をまさに使うように見ることが出来る工夫である．人の痕跡がない絵図に人は入り込むことはできにくいという研究がある．人や乗り物，道，地名などが絵図の中に点在していることで，まるで自分がその絵図内部を周遊し，その場所に存在しているかのように感じる．これが古来より親しまれて来た鑑賞方法である臥遊である．絵図内部に鑑賞者をつなぎ止め，眼を身体化させる方法だともいえる．このように，絵図の部分へと入り込み地域を仮想体験する把握の仕方である．

臥遊においては「場の景」，地域を巡る「ルート」，臥遊的鑑賞をより容易にするため描画対象に「意味領域」を持たせ，さらには地名や場所名などの「名称」を表記することで，鑑賞者は自由に画面内を動き回ることができると説明できる．

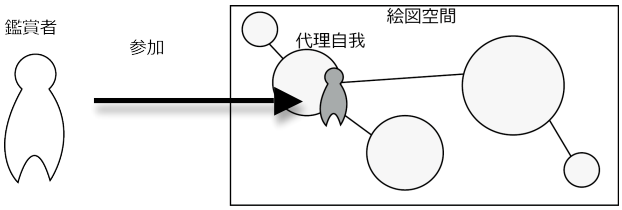


図-3　臥遊的把握

⑷ 絵図での自己の定位による把握

絵図である以上，地理的な情報を卓越させ分かりやすさを重視し，鑑賞者の視点が地域の中のどこにあるのか定位させる必要がある．定位できることによって，人は安息を得て，絵図の中へと没入することができるのである．このように，絵図の中にいかなる場所があり，それらがどのように関係しているのかを把握する仕方である．

「名称」によって，鑑賞者が見ている地点を把握し，さらには，描画対象の「配置」の工夫によって全体の中に視点を位置づける．加えて，描画する地域の顔を定める「方向」の考慮によって定位を促すと説明できる．

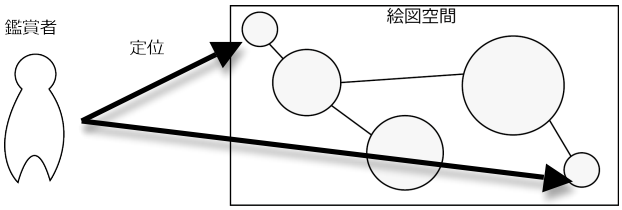


図-4　定位による把握

⑸ 絵図の眺め方がどのように描かれた地域の把握につながるのか

以上より描かれた地域に対する主体の４つの把握の仕方を示された．

本節では以上４つの把握の仕方を踏まえ，絵図の眺め方がどのように地域の把握へと繋がるのかについて論じる．背景に研究の切り口として両者の類似性の可能性について述べたが，ここでは，ここまで提示した把握の仕方をもとにその両者の関係を説明する．

鑑賞者は、場所と通路と領域というスキーマでもって，絵図に描かれた地域を把握する．

そして「地域の全体像を一目で把握」するためには，「入れ子」の見方と，「定位」を組み合わせたものによってなされると考えるとができる．鑑賞者の視点は入れ子的把握に従って画面全体と部分を行き来する．加えて，名称や配置の工夫によって定位を促し，絵図全体の理解を容易にする．入れ子的な把握と定位による把握の組み合わせが眺め方の①に関係する．

また，「地域内部の部分的な事物を眺め仮想的な体験」をするとは，「入れ子」把握と「参加」の把握の組み合わせによってなされると考えることができる．視点の伸縮によって，地名やルート，場の景などを見つけ，人の視点はそこにズームインしてゆき，鑑賞者の視点は絵図の中に入り込む．道に沿って目線は動き，まとまった地域の中で周遊する．これが②の眺め方に関係する．

最後に「全体と部分の飛躍的に視点移動しながら」の眺め方は，「入れ子」「参加」「定位」の３つの把握の仕方を組み合わせながら行われると考えることができる．それは次のように説明できる．入れ子によって地域をズームイン・ズームアウトしながら，時として絵図の中に

入り込んで仮想的行動を行う．その上で，ふと気になった絵図の他の部分に視点を移しながら，その場所がいかなるところかを定位してゆく．時として，広域と局所を，また局所と他の局所への瞬間的な視点移動である③の眺め方は，このようにして把握の仕方に関係している．

以上から，鑑賞主体が絵図を３つの特徴にもとづいて眺めるので，描かれた地域を把握できることが示された．同時に，絵図の眺め方を把握の仕方の組み合わせによって論じることで，眺め方と把握の仕方には同一性があることも示すことができた．

⑹絵図の描き方と把握の仕方の関係

１節から４節に渡り，絵図に対する主体の把握の仕方について論じ，その上で絵図の描画上の要件を設定し，それぞれの把握方法に位置づけた．さらに５節では主体が絵図を眺めることで絵図に描かれた地域が把握されると同時に，眺め方と把握の仕方には同一性があることを示した．

以上の考察を踏まえると，こう説明できる．主体が絵図を絵図に特徴的な眺め方をすることで，地域をさまざまな仕方に基づいて把握する．把握する手がかりとなるのは７つの描画要件である．これにより，描画上の要件に基づいて絵図を描くことで絵図を眺めた主体は地域を把握できる．

５．絵図の事例研究

本章では，前章で示した絵図の要件が過去に描かれて評価され現代まで伝えられてきた絵図に含まれていることを確認する．４章の結論に従えば，そのことで，絵図を眺めることにより主体による描かれた地域に対する把握が起こると考えられる．

⑴鍬形惠斎画「江戸名所之絵」（１８０３）[18]

民間刊行された絵図である．当時，江戸観光に訪れた人々のための土産物として流行を博し，１８０６年には再販されている．後に同絵師によって「江戸一目図屏風」という津山城のふすま絵として新たに描かれることになる．江戸をこの構図で描いたのは本絵図が初めてであり，後の江戸を描く絵師たちに大きな影響を与えたとされ類似の構図を持つ作品が数多く制作された．

図-5　鍬形惠斎　江戸名所之絵複製[18]　（400×550）

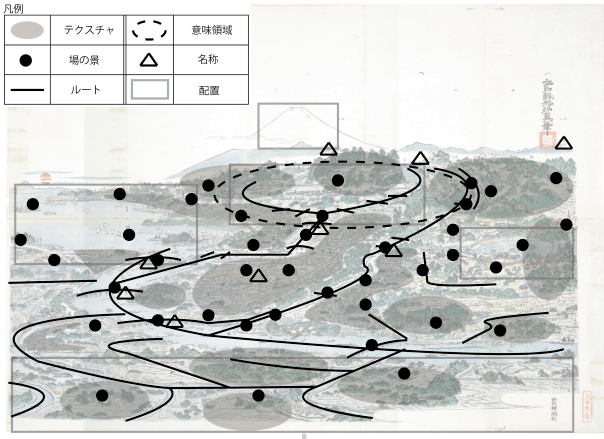
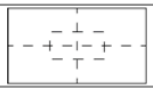


図-6　描画上の要件の分布

表-2　描画上の要件とその内容

描画上の要件	内容	例
テクスチャ	家並み	
	植栽	
	平地	
	河川	
場の景	寺社	
	橋	
	江戸城	
	船	
	人々	
ルート	街路	
	河川	
	橋	
意味領域	江戸城周辺	
名称	場所名	
	地名	
配置	中心	
	左右前後	
方向	東から西	

⑵ 描画上の要件の確認

図－ 6に描画上の要件のうち，絵図内に記述可能な６つを記した．配置に関して，近傍に隅田川の左岸地域を描き，中心に日本橋と江戸城，左右には海と不忍池，遠景には富士山を強調的に添えているように，一目さまざまな場所の位置を確認できるよう描かれているようにみえる．東から南向きにの方向で描かれており，日本橋や江戸城が正面を向くよう配慮されている．また，名称に関しては２７３[19]あるため，画面の制約の関係上全てを記すことが出来ない．そのため，代表的ないくつかを記すにとどめた． これより，「江戸名所之絵」には４章で示した絵図描画における７つの要件が全て含まれていることが分かる

次に，各描画上の要件に対応する具体的な内容を**表－2**まとめた．これらを踏まえ特徴的な描き方についていくつかを述べる．

①家並みと植栽の「テクスチャ」の卓越

一目みると，家々が稠密に並んでおり，それらを取りこむように，または家々の隙間に多くの植栽が描き込まれており一目で緑と家の多い地域だと見て取れる．

②「テクスチャ」の中に埋め込まれた「場の景」

図－ ６をみると，テクスチャと場の景が重なっている部分が多くある．テクスチャによる均質で平坦な空間の中に，場の景が埋め込まれていることによる．両者は独立して描かれるのではなく，あくまでも組み合わせて描かれることが多い．

③橋が「場の景」であり「ルート」でもある

橋が大きく描かれることで橋上での活動が描き込まれ，賑わいを見て取れると同時に，両岸を繋ぐルートとしての役割を果たしている．

④「意味領域」としての江戸城をとりまく参勤行列

江戸という地域，また江戸城を特筆すべき出来事として，江戸城の周りの橋には数多くの参勤行列が描き込まれている．

⑤遠方の「名称」

絵図は描かれない地域の名称が遠方に描かれる．描画対象と成る地域だけに留まらない広い空間が暗示される．

６．まとめと今後の課題

本稿では，絵図の記述上の要件を，主体による絵図の把握の仕方の考察から位置づけ，主体の地域の認識の在り方へ迫ろうとしてきた．

３章で，絵図の眺め方の特徴を提示した．次に４章では，絵図を眺めることによる描かれた地域の把握の仕方には「入れ子」「参加」「定位」があるとして，その眺め方と絵図に描かれた地域の把握の仕方には関係性があることを示すことができた．結果，絵図の描画上の要件を満たすことで，絵図を眺めることで特有の描かれた地域の把握が可能になることを示した．

５章では事例分析を通し，「江戸名所之絵」には描画上の７つの要件の全てが満たされていることを確認し，それぞれの要件の具体的な内容と特徴を述べた．

今後は概念的に述べた４章の内容を実証することが課題である．また，実際の地域を認識することと，絵図に描かれた地域を把握することの関係についても考える必要がある．

本研究はJSPS科研費23360229の助成を受けたものです．

参考文献

1) 内田欽三：鍬形惠斎「江戸一目図屏風」の成立をめぐって， サントリー美術館論集3 pp. 183-210， 1988
2) 杉本史子：時事と鳥瞰図 － 幕末，新たな空間の誕生と五雲亭貞秀， 千葉県史研究16， pp. 45-67， 2008
3) 中西僚太郎：明治・大正の厳島を描いた鳥瞰図， 歴史人類， pp. 58-82， 2010
4) 大久保純一：広重と江戸鳥瞰図，国立民俗博物館研究報告109，pp. 21-44，2004
5) 岸文和：江戸の遠近法，勁草書房，1994
6) 柳川正宏，仲間浩一：複合表象としての都市景観に関する研究－ 江戸名所図会を対象にして－ ，都市計画論文集31，pp. 181-186，1996
7) 宮崎保光：鳥瞰図・絵図における記号特性と制作過程のVRアルゴリズム，名古屋造形芸術大学名古屋造形芸術短期大学部紀要14，pp. 133-145，2008
8) 久保友香：浮世絵の非透視図法に関する研究，東京大学新領域創世科学研究科人間環境学専攻学位論文，2006
9) 吉坂隆正：魚眼レンズ的世界把握について，日本建築学大会学術講演梗概集 計画系45，pp. 67-68，1970
10) 中村昌広：まちづくりへの参加の新しい局面とその道具としての「ガリバー地図」，都市計画論文集24，pp. 511-516，1989
11) 中村良夫：風景を創る，NHKライブラリー，2004
12) 中村良夫：風景学入門，中公新書，1982
13) ノルベルグ・シュルツ：実存・空間・建築，鹿島出版会SD選書，1973
14) 佐々木葉，長谷川智也：地域景観認識の表現媒体としての絵図－ 岐阜県恵那市での試みから－ ，景観・デザイン研究講演集No. 6，pp. 238-244，2010
15) 前掲13)
16) 前掲11)
17) 前掲12)
18) 出典，財団法人東洋文庫複製画
19) 佐藤琴：都市を描く－ 東西文化に見る地図と景観－ ，pp. 211-245，東北大学出版会，2010